



Title	モルタザー・モタッハリー 宗教学者の経済基盤と組織化：宗教階層の組織化における基本的問題
Author(s)	嶋本, 隆光
Citation	大阪外国語大学論集. 2006, 33, p. 225-249
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79987
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

モルタザー・モタッハリー
宗教学者の経済基盤と組織化
(宗教階層の組織化における基本的問題)

嶋 本 隆 光

Mortaza Motahhari : The Economic Foundation of
Religious Scholars and their Organization
(The Basic Problems concerning the Organization of Religious Class)

SHIMAMOTO Takamitsu

関心と責任

イスラームという正しい宗教が高められることを望み、さらに遠い過去や近い過去においてイスラーム教徒が進歩あるいは退歩した原因について考える人は、その指導者の組織、すなわち聖職者階層 (ruhaniyat) の聖なる組織について考えずにはおれませんし、またその進歩的かつ高尚な望みについて考えないわけにはゆかず、そこにある問題と混乱について心を痛めずにはおれません。と、申しますのは、正しい運命 (qadar) とは、次の通りだからです。すなわち、あらゆる種類の矯正や改革をムスリムの営為として起こすか、あるいはムスリムの宗教的指導権を公式の資格として有するこの (聖職者階層の) 組織によって直接的に生じさせねばなりません。または、少なくともこの組織がその (矯正、改革の) 運動と調和していなければならないか、のいずれかです。

もし、(この) 改革および宗教の運動が一個人あるいは何人かの人によって開始され、宗教学者の組織が準備も協調もできていないと仮定すれば、多くの成功を望めないことは言うまでもありません。

イスラームという聖なる宗教の特徴の一つは、共同責任 (mas'uliyat-e moshtarek) が存在するということです。すべての責任は、保護、遵守 (re'ayat), 指導が相互的であり、自らをイスラームと等しく考えている者は、自動的にその指導的組織との関係が義務的であることを感じます。

私たちの社会にいる知識人の中には、関心や信頼が欠如しているために、宗教学者の組織や問題点、ならびにその問題の解決方法について考えたことのない人がいます。同様に、考えが足りず、十分情報を得ていないけれども関心を持っている人々もまた、この種の問題について彼らの単純な頭脳を用いるだけで、(実は) あまり考えていないのです。しかし、イスラーム知識人で関心を持つ者は ('alaqehmandan-e rowshanandish-e Islam), 最も重要なテーマの一つ— (このことを) 彼らはおのずと思索するのですが—それこそが (本



講演）の主題なのであります。

私にとってすべての誉れは次の点です。すなわち、この（宗教学者の）階層に位置を占めて、その収穫の落穂拾い（khosheh chini）の一人に数えられ、宗教学者の家庭で育ち成長し、宗教学院で人生を送ってきたことです。その結果、記憶にあるかぎり、徐々に社会の問題を考えることができた時点から、この問題（組織化の問題）について私は考えてまいりました。

問題の発端（risheh-ye asali）

13年ほど前のある夜のこと、コムの町で教授や知識人からなる親睦会が開催されました。私もその会に参加する光栄を得ました。そこで宗教学者の組織の問題点、欠陥について論議がなされました。その議論とは、次のようなものです。まず、私たちの知識と宗教学者の学院の異なった知識の領域から見て、昔は注釈学、歴史、伝承学、法学、法学原理、哲学、文学さらに医学や数学においてすら、包括的（jame'）であり、多様であったのに、最近ではなぜ徐々に限定されてきたのか、いわゆる過去には大学（jame' o daneshgah）であったのが、今では全体に法学の（単科）大学が現れ、そのほかの分野については、なぜ責任を外されることになってしまったのでしょうか。なぜ仕事もせずに、問題を起こす（mozahem）（役に立たない）雑草のような人々が宗教学者の聖なる領域にたくさんいて、宗教学者である指導者が、一本の花に水を与えるために、茨や雑草にさえも水を与えるようなことをしなければならないのでしょうか。なぜ私たちの間では、基本的に沈黙、静止、死んだ振りをする（tamavat o mordehvashi）が、自由や雄雄しい活動以上にはびこっており、すべての者は自らの地位や現状を保全しようとして、やむなく言葉を控え、行動を抑えるのでしょうか。なぜ私たちの綿密な計画が必要に応じて整備されないのでしょうか。

か。どうして著作や著者、出版社や雑誌が十分でないのでしょうか。称号やタイトル、(うわべだけの) 仕草や概観、虚飾がなぜ私たちの間でこれほどまでに広く行われており、残念なことに、日々ますます強くなっているのでしょうか。私たちの真正の指導者や知識人が、計画を定めると、他の指導者たちがそれらを否定して、以前の自分の考えを忘れてしまうのは、いったいどのような不思議の力が働いているためなのでしょう。

若干話し合いがもたれた後、もろもろの問題の根本的な原因について協議されました。(そしてその集会では) すべての者が自らの考えを、これらの問題の根本的原因について表明することが定められたのです。各人が意見を言いました。私も自分の考えを申しました。しかし、友人の一人が意見を表明いたしまして、私は彼の意見が私自身のものや他の意見より優れていると思いましたし、今もそのように考えております。彼が言ったのは、宗教学者の欠点と諸問題の根源的で根本的な原因は、財政制度と生活手段確保の方法にあるということでした。彼の発言した内容は、すべての荒廃の原因は、「イマームの取り分 (sahm-e Imam)」¹⁾ である、ということでした。

もちろん、彼の意図と私の意図は、自分たちの様々な欠陥の原因の原因が、宗教において(知られている) いわゆる「イマームの取り分」という一項目を制定したことであると言うことではなかったし、今でもそう考えてはおりません。私の信念によれば、そのような一項目を定めるのは、一つの目的、すなわち宗教の活性化と非常に力強いイスラームを宣揚するという目的のためである、ということです。後で申しますが、この項目(すなわち「イマームの取り分」)は、宗教学者組織の力と独立の保証となります。また、責任あるものが自らの責任の遂行を控えるということでもありません。伝統的な方法がございまして、徐々にこの事項の遂行と利用がなされてきましたが、私たち宗教学者の特別な組織となり、その結果この制度(「イマームの取り分」)のあり方は多くの欠陥と問題の根源となってしまったのです。

正しい組織

まず次のように考えられます。大小を問わず、社会の健全さと荒廃は、ただ一つのことに関係があります。すなわち、その社会の人々に健全さがあるか、また健全さを欠如しているかであり、特に指導者たち (za'ma) (の健全さの如何であります)。すなわち、すべての問題に気づいているものが僅かにいて、その人々の多くがこのように考え、この基盤について思いを致しているということでもあります。

これらの人々は、社会のいくつかの腐敗に気がついたとき、治療 (chareh kar) を施すことが正しい指導であると見做します。言葉の正しい意味で、人物(人材)であります。しかし、より一層調査した人々は、次の結論に到達しております。つまり、組織と社会システムの影響力と重要性は、指導者の影響力と重要性以上であって、まず第一に真正な組織について考えねばならず、第二段階として真正な指導者について考えねばならぬということです。

プラトンには有名な社会論があって、「プラトンの賢者の町 (madineh-ye fazeleh-ye

Aflatun)』²¹⁾として知られています。イスラームの賢者の中で、ファーラービー (Abu Nasr-e Farabi)²²⁾ は、プラトンに従って見解を表明しております。この二人の賢者は、自らの見解の基盤を人々の徳 (salahiyat) に定め、人間の高貴さ (esalat) について考察しました。彼らはすべての関心を次の一点に向けております。すなわち、社会の諸事情の統制をどのような人々が掌握するべきか、そして、その人々はいったいどのような知的、行動的な知恵を持っていなければならないのか、という点でした。しかし、社会の組織 (tashkelat o nezamat) はどのようなものでなければならないか、またその「理想的な (ideal) 人々」が、どのような社会的秩序の中で統制権を掌握するべきかということは、この二人の賢者の関心事ではなかったのです。

以上で批判されてきた見解について、(二人の賢者は) 人々の思想、行動、精神 (ruhieh) における、組織の驚くべき大きな影響 (中でも指導者 (za'ma) の組織の影響) について注意を払わなかったのです。さらに、次の点にも注意を払いませんでした。つまり、もし秩序が真正なものであれば、より少数の正しくない人々が違反行為を行うし、もし (秩序が) 真正なものでないならば、正しい人はより少なく自らの行動と願望を实践する力を見出し、時々自らの願望と思考を失って、その (真正でない) 組織と同化 (hamrang) する、(ということに注意を払いませんでした)。

ある知識人はプラトンの見解を批判して、次のように言っています。

プラトンは、「誰が社会を統治しなければならないか」という不吉な (shoum) 発言をすることによって、政治哲学上永久的な過誤と危険性を生み出したのである。より興味深く、倫理的問題とは次のようなものである。すなわち、邪悪で真正ではない見解が、当該社会に害を及ぼすことがないか、我々はどのようにして社会組織を構築できるか、ということである。

真正な指導者たちが重要であるのは、社会組織の改良、安寧、変革に関して (彼らが) 持っている思考方法 (に関する見解) に過ぎません。しかし、真正な指導者たちは、基本と構成において、彼らの思考法は不正 (na-saleh-ha) に対しては同一であって、その違いは倫理的、個別的観点からのものだけということです。すべての者は、鑄型 (qaleb) の中で作業を行っているのです。彼らの存在の結果 (形跡) は不正に対してはさほど多くなく、社会的変化の根源は、(彼らにとっては) 注目するほどのものではないでしょう。

もしプラトンやファーラービーの見解に説明を加えれば、(二人は) それらの真正な人々に重要性を与えていたのであって、(彼らが=真正な人々が) 社会組織に対して統治する権限を有する (hakem bar saze-man-ha-ye ejtema'i) のであり、それらの宣告を受けた人 (mahkum) である、ということなのでしょう。

社会の構成、秩序は、その社会の人々、大路や小路の位置に比較できるし、その町中で移動する人々や移動手段に比較できます。それぞれの町は大路をひいたり、小路を作ったりする方法において、町に住む人々は、同じ大路の曲がり道 (pich o kham) や小路の内側に束縛されます。そして、小路や交差点を移動します。その町の人々の最大限の自由とは

このようなものであって、同じ大路や小路の中で、より近く、より人のいない (khalvat - tar), より清潔でより心地の良い道を選ぶのです。

もしその町が計画性もなく、徐々に拡大し、都市計画 (shahr sazi) に基づかなければ、同じ街での生活や往来を現状と比較しても手の打ち様がなく、往来や車の運転やこの街の状況について、行政は困難に落ちるでしょう。その町の建設に際して、このように段取りしているにもかかわらず、人々によって仕事はなされません。成就された唯一の仕事はその町の大路や小路や家屋の現状を変化させたことであって、それで自己満足しているのです。

たとえ真正な指導者たちが、自分達に欠陥があることを組織のトップであらかじめ分かっている、彼らの仕事と他の人々の (仕事) との相違は、一人の人が曲がりくねった秩序のない大路や小路から (別の) 乱雑な小路へと最良で最も近い道を選択する程度の相違に過ぎないのです。

我々の宗教学院 (Howzeh-ha-ye 'Ulum) の特権 (mazaya)

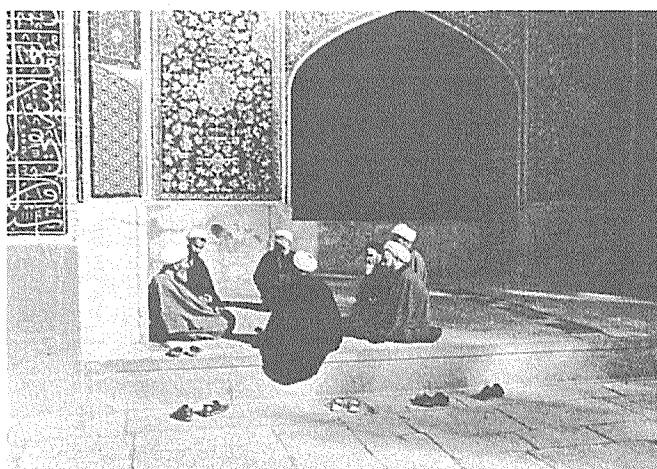
我々の学院の環境は、独自の特権と特徴を持っていて、そのほかの環境と比べて類を見ません。宗教学院の環境は、快適で健全、純正で精神的 (ma'naviyat) であります。すなわち、学院を支配しているあの全般的精神 (ruh) は、同様の精神でありまして、この特徴を欠いている人々は (afraad-e faqed) 例外的であって、この学院の精神に反する人に数えられます。学僧たち (tollab) がたがいに認めている特徴は、知識と敬虔の特権以外にありません。他の人々に対する一人の学僧の実際の優越と尊敬は、学識 (tahsilat), 清さ (qods), 敬虔に基づく以外にはありません。学僧の中には、貧しい者と裕福な者、田舎出身者と都会出身者、労働者 ('amaleh) の子息や商人、名士 (aqazadeh) の子供がおります。昔は貴族や王族の者までおりました。しかし、すべての者は自己の利益を放棄し、単に知識の習得と知の特権だけがありまして、学僧たちの尊敬を一人の人物に対して格別に求め、その人物の利益を彼らの見解において高めるのです。

宗教学院の雰囲気は、禁欲と満足 (qana'at) (の雰囲気) であります。贅沢や (esraf) 官能性 ('ayashi), 晩餐会 (majles-e shabneshini) は、他の階級の間ではありますし、時々宗教の学問以外の学生たちはそのような夜会で活況を呈しますが、(学院の学生には) そのようなことはありません。この種の催しについての考えすら、一人の宗教の学生には生じることがないのです。もしある者がこのようなことに僅かでも心を動かすようなことがあれば、彼の墮落は決定的であります。全体として、学僧は自足しており、儉約 (kam kharij) であって、人々の財政上の負担となっていないのであります。

教授と学僧の師弟関係は健全で、敬意を伴うものです。弟子たちは自分たちの教授に対する敬意を、明に暗に十全の礼を尽くして (ba kamal adab) 踏み行います。(教授の) 没後でさえ、絶えず真正で恵みの祈りをもって記憶します。このように教授に対する敬意を持ち続けることは、宗教的知識の習得、学識の所産 (mawlud-e ta'limat) によるものでございまして、宗教の神聖なる権威によるものでございます。そして、教師の知識と敬意に到

達するのです。我々の見るかぎり、他の学問の分野においては、このような状況はまれであります。

学僧たちの（学習の）習慣は、次の通りであります。教授から授かる授業に基づいて、自らの考えをめぐらせます。そして、自らの学習を書物に基づいて行います。加えて、同級生の一人とその授業について討



論を行うのです。より高度な学習については、授業で (dar majles) 教授からそのことについて学び、考え、そして夜に書きます。したがって、学僧というのは、オウムのように丸暗記するものではありません。現行の学習方法は新しいものなので、熟慮 (ta'moq), 思索 (tafakkor), 実験 (tajzieh), および分析 (tahlil) から成っています。教授の権限は独占的ではありませんし、教授の選択は学生自身にあるので、能力のあるすべての学生が、レベルの低い書物を（他の学生に）教えることも可能です。このように、一人の宗教の学生は、学生であると同時に教師であることも可能なのです。

学僧たちの就学法がほかの方法に比して利点 (emtiyaz) があるのは、次の理由によります。学生たちは教授から学ぶ授業（の内容）を詳細に研究し、後に討論し、書きます。同時に、他の者に教えます。これによって、学生たちは自ら学んだことを深めることになるのです。

学生たちの修学の目的は、修了証書 (daneshnameh) ではありません。著名な教授の評価 (namrat) は弟子にとって特権ではないのです。討論会 ((majles-e mobaheseh), 教授の授業 (howzeh) における弟子の質問や彼に対する批判、彼（学生）自身の授業、教授や下位の学生たちの自然な (qahri) 注目こそが一人の学生にとって最高の誉れなのです。

宗教の学生たちは、当然のことながら、教師や教授の地位を目指します。教授の選定は選択制 (entekhabi) であって、指名制 (entesabi) ではありません。すなわち、学生自身のみが、試験や検定 (ekhtebar) に際してより良い教授を選択するのです。したがって、一種の自由と民主主義が宗教的学問の場 (howzeh) には存在しておりまして、これは他の場所にはないものです。このように、彼ら（学僧）の間には、最高の (aslah) 選択の規則 (qanun) が支配しております。（これに対して）新しい文化組織 (mo'wasses-e farhang-e jadid) においては、クラスのために指名によって教授を定めることは、地位の観点から見て、より高いものです。そして、同じ理由で、教授が自分のクラスに適正でないということがよく起こっています。（その教授は）より高いか、あるいはより低い授業に適しているのでしょうか。彼ら（不適正な教授）の学生たちは満足しておらず、尊敬してもいないのに、単

に評価をもらえなかったり、落第するのを恐れて、不満足の状態でその教授に従っているのかもしれませんが。この種の無統制と無規則性（bi-hesabi-ha）が古い学習において多々あります。しかし、我々の宗教学院においては、この種の無統制、無秩序は微塵ありません。

宗教学院において人々を前進させるこの原則に基づき、自然の原則（namus-e tabi'i）にしたがって、最良の選択がなされているのであって、ちょうどアリー（彼に平安あれ）が、神のウラマーたちに述べたとおりであります；

فَكَانُوا كَتَفَاضِلِ الْبَذْرِ نَبْقَىٰ فَيُؤْخَذُ مِنْهُ وَيُلْقَىٰ قَدَمِيْزُهُ التَّخْلِصُ وَهَذَبُهُ
التَّمْنِيْصُ

選別され、精練された種子のようであって、それらの中で最良にして最も精練されたものが、播種のために選別されるのである。

学生たちは一段一段この原則に従って上昇してゆき、マルジャイヤト（marja'iyat）という最後の階段に到達します。この最後の階段に達するまで、自分の教授をより水準の高い人物にしよう、という学生たちの信念があります。しかし、最後の段階に達したとき、基金（vojuhat）サフメ・イマーム（イマームの取り分）（sahm-e Imam）、分配（taqsim）、年金（shahrieh）が入ります。時として計算（hesab-ha）が入り込むのは、このときだけです。もはや、最良の選択の規則は支配しません。

これらが（宗教学院の）特権であって、宗教的学問の学生の修学の道に存在します。一方、欠点もありますので、それについて話さなければなりません。

宗教学院の欠点

宗教の学生たちには入試（konkur-e borudi）がありません。したがって、この聖なる制度に入る資格のないものが入学してくる可能性があります。試験がないので、学生たちは進級するのに程度の低い本から高い本まで、（選択は）自由です。低い水準を行う前に、高い水準に歩を進め、習得が滞り、興味をなくすことがよくあることは明らかです。

学生たちは能力を伸ばすことができずに、結局、法学（faqahat）や、哲学、神学（kalam）、文学、歴史、解釈学（tafsir）そのほかの分野で才能のある者が、能力を持つ分野以外を履修したために、自己の能力を十分に活用できないかもしれません。

宗教的学問習得の領域は、現在大変限定されていて、すべての分野は法学に同化されています（hazme shodeh）。法学の分野そのものもまた、小道（majra'i）に迷い込んでおり、100年も前からこの方式は進化していません。

聖職者（ruhaniyat）組織の欠点の一つは、際限のない自由と聖職者の服装の制限であります。徐々に聖職者たちは服装の点で他の人々との相違が生じてきて、特別な服装を身に着けている者が見られます。ちょうど、軍人や他の職業の人々もまた、特別な服装を身に着けているのと同様です。

聖職者の組織（tashkilat）においては、そのほかの組織とは異なり、何人でも妨げなく特別な服装を着用できます。知識もなく信仰もない人々が、この服装の特権によって、このような服装を身に着けて尊敬を受けるのです。

宗教学院では、アラブ文学が読まれています。しかし、誤った方法で（読まれています）。結局、宗教の学生たちは、何年もの間アラブ文学を習得した後で、アラビア語の文法を習得するにもかかわらず、それを完全にできないばかりか、流暢にアラビア語を運用できず、書くこともできないのです。

過度の議論（efrat-e mobaheseh）や原理に関する知識（'elm-e osul）が増すこと（shoyu'）は、一種の力や知性が学生の思考において生み出される一方、一つの欠陥があるのです。つまり、学生たちの思考法を社会問題について現実を直視すること（vaqe' bini）から遠ざけてしまう、ということです。合理的なアリストテレスの論理学ですら、十分に習得されず、教えられていません。学生たちの思考法には、多くの問題点があります。この点こそ、学生たちが社会問題において現実を直視する能力を持たない最大の原因になっています。

現在、宗教的指導者組織において存在するようになったもっとも重大な欠陥は、聖職者層の財政と生活（ma'ash）、財政構造（nezam）、日々の糧の獲得方法（terz-e ertezaq）に関係しております。

財政（budjeh）の問題

聖職者の生活をよりよくするためにどのようにすればよいかという問題に関して、いくつかの見解を提示できます。

(A) ある人々の考えによれば、聖職者は特別な財源を必要としない、というものです。聖職者たちも他の階層の人々と同様に、自らのために仕事と収入源を持たねばならないし、自分の労働によって生活しなければなりません。自らの時間の一部を生活のために、またある部分を自らの特権（sho'un）、例えば修学、研究、教授、法的問題の解決（efta'）、指導、教えの宣揚（tabligh）のために用いなければならない、というのです。

このグループの人々は、聖職者とその特権（sho'un）は、イスラームにおいて特別の財源を割り当てることができるなら特別な職業ではない、と考えています。自らの生活の糧を確保して、聖職者としての職業の責任を果たす能力のあるものは、この職業につくことができる。もし、この職業の責任を（他人に）負うことを望み、そうしてすべてを社会に負うのであれば、最初からそのような企て（mojahedeh）をしないほうが良い、というのです。

このグループの人々の考えによれば、イスラームの開始されたころ、すなわち預言者（彼に平安あらんことを）とイマームたち（彼らに平安あらんことを）の時代においては、同様の責務を持つ人々がいて、法的に許容されること（halal）と禁止されること（haram）を教え、人々を諭し、説教をしておりました。また、学習の場（howzeh-ha-ye-dars）で活動し、自らそのような場を持って、同時に彼らはそれぞれの生活のために職業を持ってお

りました。彼らの多くは、例えばナツメヤシ売り (tamar)、薬商 (attar)、布商 (bazzaz)、絹商 (khazzaz)、水車番 (tahhan)、バター売り (seman)、蹄鉄屋 (hedha vasha) そのほかの職業を持つ者として、伝承や法学、歴史の書物の中で知られております。神の使徒や純正なイマームたちが、一人あるいは何人かの人々にあらゆる仕事から手を引くように命じたとか、今日聖職者の仕事とされている法的問題の解決や教授、集会の導き (imamat)、説教、教えの宣揚などに専門的に従事するよう命じた記述はどこにも見られません。以上がこのグループの見解です。

事実、もし人々が自らの生活 (の糧) を別のやり方で確保しておりながら、聖職者としての事柄の責任を負っているとすれば、大変結構なことです。常にこのような人々は少ないものでしたし、今もそうです。しかし、すべてのものがこのようであればならないとか、このようであれば (聖職者に) なってはならないとか言うことはできません。なぜなら、人々の生活の現状において、イスラーム開始期と比べて、生じた変化や知識、必要の時間的拡張の程度を考えると、あるグループの人々が全生涯を修学と人々の宗教的事柄において教導すること (edareh) に (捧げる) 必要があります。やむなくこの方途のために、正しく費やされる特別な財源が必要となるのです。

イスラーム開始のころ、必要事項はこれほど (多く複雑) ではありませんでした。困難 ('oqdah-ha) や疑い (shobhan-ha)、さらに同様なイスラームの敵はそれほど多くありませんでした。一団の (奉仕) が、常にイスラームの防衛のために、さらに人々の宗教上の必要に答えることが大切です。しかし、公正 (ensaf) とは次の通りです。すなわち、現在例えば金曜礼拝の指導をしている聖職者は、特別の一つの階層 (yek shan) ではないし、それを口実にしてあらゆる仕事、奉仕から身を引き、礼拝のときを待って、モスクに行き帰ってきたり、葬儀 (khatm) の集会の飾り (jihat) をしたりして、このようなことを自分の仕事に定め、生涯が社会とともにある、そのような権限は人間にはありません。

いずれにしても、これは硬直した考えであって、単に一つのことがイスラームの初めからなかったといって、必要が生じた現在も必要がないのではありません。

(B) 他のグループの考えは、聖職者は自らの特別会計としてワクフ⁽¹⁾ や現行のサダカを利用するというものです。おそらく世界のあらゆる聖職者の組織は、シーア派を除いて、その財政は全面的に (monhaseran) ワクフとサダカから成り立っています。

イランの大半の町では、宗教学校 (madares-e 'olum-e dini) が設立されていて、多大な収益を持つ土地がそれらの学校のワクフになっております。そして、過去においては、それらの学校のワクフは、テヘラン、エスファハーン、マシュハド、タブリーズ、シーラーズ、そのほかの都市において宗教的知識を習得する上で大きな助けとなっておりました。

しかしながら、残念なことに、現在は申し上げられない理由で、これらのワクフの多くは個人の私有地になっておりますし、その他、若干のワクフの名目で残っているものが聖職者の統制下にございまして、イスラームとイスラーム教徒の福利組織の利益のために運営されております。また、あるものは、ワクフ省 (awqaf) の権威の下にあったり、またそ

のほかの形で荒廃しておりまして、少しばかり残っているものは、権利上、法律上の利益を生み出しております。

聖職者の組織の統制下にありうる、またその必要があるワクフは、学校のワクフに限定されません。法的に聖職者組織の統制下にあることが認可され、またその必要が確かにあります (qalam-ha va raqam-ha-ye dorosht-tari dasht)。これまで何回もこの問題は、聖職者の高位の者と政府高官の間で討議され、この財政（基盤）は聖職者組織の統制にあるということでしたが、不明な理由で、結論に達しておりません。

もしワクフの問題が形を整え、合理的で統制の取れた組織が成立すれば、聖職者の通常財政を確実なものにするばかりか、宗教や文化、教育、一般の倫理道德に対して、完全に大きな助けとなるでありましょう。しかし、現行のままですと、腐敗の大きな原因であって、現在常にあらゆる改良の妨害となり、イスラーム社会の進歩の障害となっている人々を力づけることになるでしょう。

(C) もう一つ（三番目のグループ）の方式 (ferz o surat) は、「イマームの取り分」の利用に関するものであります。私には他の宗教に関する情報はございません。それらの宗教のテキストは、財政に関する法を定めていて、聖職者の生活や宗教指導者組織の運営と合致するのでしょうか。それとも、しないのでしょうか。しかしながら、イスラームのシーア派の見解によりますと、ホムス（五分の一税）⁽⁵⁾ についての聖なる句の用法に関連する箇所を活用いたします。

ホムスとは、戦争の略奪品 (ghana'yem-e jangi) や鉞山（からの収益）、年間の純益、およびそのほかから成っていて、すべての人はそれらの五分の一を、個人の支出を差し引いた後、イマームおよび宗教指導者の統制下に委ねるというものです。

ホムスの半分は、「イマームの取り分 (sahm-e Imam)」と名づけられておりまして、シーア派の法学者の見解によりますと、その活用は宗教が保持しております。

今の所、一つの会計がありまして、我々の宗教組織が廻っており、また聖職者の制度がそれに基盤を持ち、聖職者が自らの組織の運営方法を見出し、宗教的なあらゆる事柄に多大な影響力を行使できるのは、（まさに）「イマームの取り分」の（おかげ）でございます。

（一般信者は）聖職者やモジュタヘドたちに対して、一種の税金 (maliyat) であるこの財源の受領については、まったく義務も強制も (elzam o ejbar) ございません。自らの信頼する聖職者に対して、完全に満足し、心の香り (teib-e khater) を持っているのは、イスラーム教徒である信者自身です。彼らは（聖職者の元へ）赴き、この法的税金を支払います。そして聖職者にはこの税金の監査機関 (sazeman-e momayez) がありません。ただ、人々自身が、良心と信仰の命令に従って、自分たちに属する金子、それは多くとも、小額であっても、（たとえば）1000 トマンとか、数万とマンにいたるまで、支払うのです。「イマームの取り分 (サフメ・イマーム)」のワクフ会計に対する精神的独占は、支払う人々の恩恵、謙虚さ、献身の表現なのです。

一般の人々 ('ameh-ye mardom) から人に対して「イマームの取り分」が支払われるのは、彼らの分別の徳、善意によるのであります。しかし、一方実際に相手側が徳 (salahiyat)

を持っているか持っていないかは、一般の人々がどの程度自らの分別 (tashkhis) を行使する際に、過ちを犯すか犯さないか、實際上、相手の徳以外の要因が干渉していないか、ということによるのです。いずれにせよ、究極の褒章が (barabbdeh-ye neha'i) が「イマームの取り分」であります。一連の均衡の取れた因果の鎖によって、ある人物を明らかにすることと、人々の善意の序列が (定まり)、その後、「イマームの取り分」にいたり、その後 (イマームの取り分の) 分け前 (ze'amat) と管理権支配権 (riyasat) が定まるのです。

集権化と権力

新しい (西洋) 文明がまだイランに来ておらず、都市間の交流手段が今より乏しかった100年ほど前まで、各都市の人々は、自分たちの資金 (vojuhat) を同じ町のウラマーに支払っていました。そして、それらの資金の大半は同じ町で費やされていました。しかし、この一世紀において、それぞれの地点相互に接近する新しい手段が発明されたために、資金はマルジャイ・タクリード⁽⁶⁾ という人物に支払うことが習慣になりました。これ以後、(マルジャイ・タクリードの居住する) 中心地は注目を受けるようになったばかりか、彼の命令が従われるようになりました。その結果、(これらの資金のうち) イマームの取り分 (サフメ・イマーム) といわれる部分が新しい土地からもたらされて、宗教学院 (howzeh-ye 'ilmieh) の (収入として) 入ることになったため、学院は拡大しました。全体として、(人々の) 往来が盛んとなり、人々が身近にマルジャと面会し、学院が拡張し、学生や卒業生の数が増えました。徐々に町や村が (マルジャの) 影響下に入ったので、(マルジャの) 指揮権と権力 (riyasat va ze'amat-ha) が拡張されたのです。同時代にこの指揮権と権力を十分に行使し、その指揮権と権力を拡大するために新しい手段を活用した人物がシーラーズィー (Ayatollah Hajji Mirza Muhammad Hasan-e Shirazi) 師でありました。この権力と指揮権を始めて明らかにしたのが、かの有名なタバコ利権に反対する教令 (ファトワー) だったのです。⁽⁷⁾ あのお方の後、また後継者 (akhlafeshan) のために、多かれ少なかれ (「イマームの取り分」の) 分け前や指揮権のようなものが生じました。

「イマームの取り分」は次のように運営されると言われています。(すなわち) それの支出の方法は、現行の慣習に従って、100%それを手にする人の見解と結びついています。今日に至るまで、帳簿 (daftar), 会計, 監査 (rasidegi), 貸借対照表 (bilani) は用いられていませんでした。確かに、その支出はマルジャであるその人物の禁欲、敬虔さや敬神 (khoda tarsi) と結びついていましたし、第二にその人物の見識 (hosn tashkhis) や誤りを犯さないこと、第三にその人物の正しい実行力の可能性ならびに能力 (と結びついていたのです)。

長所と短所

「イマームの取り分」は現在行われている方法によりますと、利点 (mahaseni) と欠点 (ma'yebi) があります。利点は、それを支えるのがただ人々の信仰と信頼だという点です。シーア派のモジュタヘドは、政府から自己の資金を受け取っておらず、罷免や任命は政府

の権限ではありません。従いまして、常に政府からの独立が保全されていて、その権力は政府に対する権限と考えられるわけです。時々、いくつかの出来事において、政府を困らせることになりました。

同資金は独立しており、人々の信頼に依存しておりますので、（聖職者たちが）多くの出来事において政府に背いて（enheraf）対立し、政府を崩壊させる原因となりました。しかし、別の角度から見ますと、（この制度は）シーア派の聖職者の弱点でもあります。（つまり）シーア派の聖職者は、政府に強制的に服従する必要はありませんが、一般の人々の意向（saliqeh）や信念に従い、彼らの歓心を買わざるを得ません。シーア派の聖職者にとっての大半の問題（mofasedi）はここから生じているのです。

シーア派の聖職者とスンナ派の聖職者

イランの聖職者をエジプトの聖職者ならびにアズハル学院（Jame'ye Adhhar）の宗教的特権と比較してみると、この二つには組織の面から見て、まったくの相違があることが分かります。

エジプトで、まず重要なのは独立した資金を持たないことによって、第二に権力者（awla al-amr）に関する考え方が特殊であるという理由によって、（すなわち）アズハル学院の長は共和国の大統領を選ぶために任命されている（という特殊な理由によって）、エジプトのアズハル学院の長は、この点で、我々の政府では国家の第一人者（shakhs-e avval）の命令によって定められるという意味で、全国の判事（dad setan）のようなものであります。しかし、イランの聖職者にはこのようなことはありませんし、もし統治（riyasat）や個人的特権に関して政府の地位に就けば、彼（の地位）は失われることになるでしょう。

3年前、ある新聞で、大法官（mofti）とアズハル学院長を兼任していた 'Allamah Shaykh Mahmud Shaltuth 師がご自分の執務室におられる写真を拝見しました。彼の頭上には、ナセル（Jamal 'Abd al-Naser）の写真がございました。イランでは、一学僧の小さな部屋の中であっても、一人の政府高官の写真が飾ってあるなどということはいえなことです。エジプトの聖職者の指導者（za'im）は、（反）タバコ（利権）事件のような事件で、時の政府を転覆するような力を持つことは決してないでしょう。

しかし、他方では、エジプトの聖職者は生活や日々の糧、地位を人々の手中、すなわち大衆に依存していないので、（大衆に対して）自立的に見解を表明する自由を持っています。大衆のために真実を隠匿することを強制されません。一人のシーア派の聖

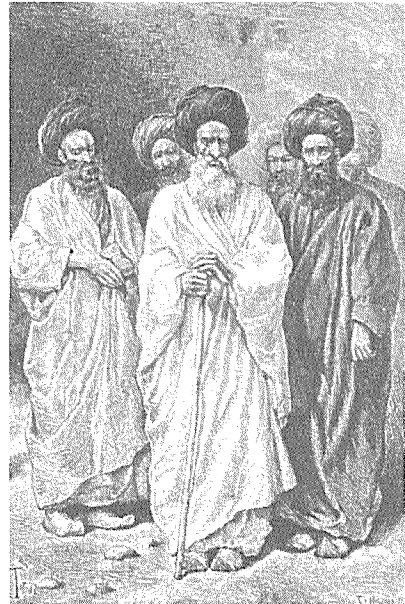


Figure 30 A mujtahid and several mullahs: after a photograph taken by Dieulafoy in Tabriz in 1881.

職者は現状において、以下のようなことが考えに浮かぶことはありません。つまり、なんと
としてでも啓蒙し (rowshan-e zaher) 改革を求め (aslah talb), 献身的であり, 2 年前に
Shaykh Shaltuth

師が 1000 年来の古い迷信を打破するために法令を出したり, また彼が取った第一歩, ある
いはそれよりも小さな一歩をとるようなことすら (ほとんど考えに浮かばないのです)。

イスラームの初期の世紀においては, イランとエジプトの宗教学者は, 現実の生活とい
う観点からは類似点がありました。イランの聖職者たちは, 開明の度合いや様々な分野に
おける多様な著述という観点から, エジプト人に遅れをとっていませんでしたし, エジプ
ト人自身が認める所では, イラン人はすべてのイスラームの知識の分野で進んでおりまし
た。しかし, 今日, 事態は逆であります。イランのムスリム知識人たち (rowshanfekran)⁽⁸⁾
は目をエジプトの知識人に向けているのでありまして, 日常の必要に関するイスラーム社
会の問題において新しい著作を出し, 自分たちの聖職者の有様を嘆いているのです。なぜ
なら, 現状においては, 大衆的な「行為の論 (resaleh-ye 'amalieh)」や, 大衆の考えの範囲
を超えない表面的な著作しか, 彼らに期待できないからです。

僅か 3 - 40 年前まで, 選ばれた献身的なグループの人々 (goruhi-ye zobdah va mokhles)
は, 自らを聖職者の一般財源 (budjeh-ye 'omumi) から切り離して, イスラーム社会の日常
の必要のために研究と著作に従事していたのです。

(ただし) 見識者 (saheb-e nazaran) によると, この数年間に, シーア派の学院の卒業生
(faregh al-tahsil-ha-ye howzeh-ye Shi'eh) の刊行した作品, 著作は, エジプトの知識人よりも
十分に深く, 学問的 (mohaqqeqaneh) であるとさえ述べているのです。

権力と自由

もし聖職者が人々 (一般信者) に頼れば, 権力は手に入るでしょう。しかし, 自由を失っ
てしまうのです。そして, もし政府に頼れば, 権力はなくなりますが, 自由は保持できま
す。なぜなら, 一般的に大衆は信用しやすく, 信仰を持った人々ですが, 無知で水準が低
く (monhat), 知識がありません。その結果, 改革に反対します。しかし, 政府は一般的
に開明的ですが, 圧制的で違反者です。一般大衆に依存している聖職者は政府の圧制や違
反と戦う力があります。しかし, 戦いにおいて, 人々の蒙昧な迷信と信仰で弱くなってし
まって無力です。けれども, 政府に頼っている聖職者は, 戦いにおいて無知蒙昧な慣習や
思想には力強いのですが, 政府の違反や不正との戦いでは弱いということになります。

我々の考えでは, イランの聖職者が経費を人々の信念に頼っていることは, その弱みと
なっていません。ただ, この経費 (財政を運用する) 組織を持たないことが大きな欠点と
なっているのです。(したがって) この財政の組織を形成することで, この重大な欠陥をな
くすることができるのです。その結果, シーア派の聖職者は権力も自由もともに持つこと
になるのです。本論の元々の目的は, この点でありまして, 理想的な聖職者とは, このよ
うな聖職者であります。「改革の方策」というタイトルの下に, (後に, P. 16) さらに説明し
ていきましょう。

大衆禍（'avamzadegi）

社会は、多くの状況において人間に似ています。時に災害を蒙ることがあります。勿論、社会の災害とは、特に社会自身でありまして、すべての社会にはそれぞれ特有の災害があります。我々聖職者の社会を麻痺させ、立てなくしている災害は大衆禍であります。大衆の害は洪水の被害や地震の被害、蛇やさそりの害よりも大きいものでございまして、この大きな害は、我々の財政システムの結果生じたのであります。

我々聖職者は、大衆禍の結果、本来進むように前進できず、隊商の前に行くことができないのです。（その語の）正しい意味である、隊商の案内人（hadi）であることができないのです。（したがって）隊商の後を遅れて行かざるを得ません。大衆の特質（khasiyat）とは、常に過去や習慣となったものと結びついている点にあります。彼らには真理と偽りの区別がありません。大衆はすべて新しいものを「刷新（bid'at）」とか「欲望（hava）」「思いつき（havas）」と呼びます。創造の原則や性格や自然の適正を理解しません。このようにして、あらゆる新規なものに反対し、常に現状維持に同意するのです。

私たちが今は承知しています。大衆（'avam al-nas）が新しい問題、例えば富の公正な分配（tawzi'）や社会正義、普通教育、国民の統治権（hakemiyat-e melli）のようなイスラームと切り離すことのできない問題に対して、つまりイスラームはこれらの問題の真実を訴えるもの（'onvan konanndeh）であり、擁護者でもあるのですが、（こういう問題に対して、大衆は）子供のような気持ちで眺めます。

大衆禍を受けた聖職者は、仕方なく、社会問題について訴えたいとき、表面的で本源的ではない問題に依拠して、根源的な問題を省いてしまうのです。あるいは、この問題に関して、まったく残念なことに、さほど重要ではなく（takher）、イスラームの廃れてしまった慣習（mansukhiyat）となっていて、イスラームの敵に手段を与えるやり方を明らかにするのです。

ああ、この災害は手と足を縛る、そうでなければ、イスラームがすべての時代に確実に新しいということを明らかにできたことでしょう。……（そして）我々の世紀のもっとも深長な社会制度ですら、イスラームがもたらしたものと競う力がないことを示したことでしょう。

我々大衆の害を受けた聖職者は、常に沈黙を論理に、静止（sokun）を動きに、さらに禁止を肯定に勝るものとするほかありません。なぜなら、これが追従の性格に合致しているからです。

大衆の統治（支配 hokumat）は、偽善や追従、うわべの装い、真理の拒否、表情の繕い、人への支払い（賄賂？）、聖職者の社会的称号が幅を利かせて受け入れられ、世に類例がないほどです。大衆の支配は、人々の自由と我々聖職者の改革を求めるものの心を痛めてきたのです。

コムのホウゼイエ・イルミエ学院におりましたところに、故ボルージェルディー（Ayat al-Lah Aga-ye Borujerdi）師の恵みあふれる授業に出席いたしましたが、ある日、法学の授業のさなかに次の内容の伝承を持ち出されました。つまり、人々が（6代目イマーム）サー

デク様に質問いたしますと、イマーム様がお答えになったというのです。ある人がイマーム様に、「以前同じ質問をあなた様の父上、(5代目イマーム) パーケル様にお尋ね申し上げたところ、別の答えでした。どちらが正しいのでしょうか」と尋ねた。サーデク様は答えて言われた。「父の言ったことが正しいのである」と。そして、その後付け加えられた；

إِنَّ الشَّيْعَةَ! أَتُوا أَبِي مُسْتَرْزِيدِينَ فَأَفْتَاهُمْ بِمُرِّ الْحَقِّ وَأَتَوْنِي سُكَكَاءَ فَأَنْتَبِهُمُ
بِالتَّقِيَّةِ:

すなわち、父に尋ねるためにやってきたその時代のシーア派の信者たちは、誠意ある動機でやって来ていた。彼らの目的は、真実が何であるかを知り、行おうというものであった。そして、父もまた真理そのものを彼らに告げたのである。しかし、(今) やって来て私に質問しているものたちは、その目的は助言を得て(それを)実行しようというのではない。彼らは私から何を聞くのか知りたいのである。私から聞くことすべてをあちこちで吹聴して、異議を唱える(反旗を翻す)だけである。私は致し方なく、タキーエ (taqieh)⁽⁹⁾ を用いて、返答したのである。

この伝承は、シーア派信者に対するタキーエであって、シーア派の敵対者に対するものを含んでいるので、故人(ボルージェルディー師)に、心の痛みを述べる機会を与えたのです。師はおっしゃいました。「驚くことはない。タキーエは本人以上に重要であり、崇高である。私自身が初めて一般の人々のマルジャ (marjaiyat-e 'ameh) であったときこのように思っていました。(つまり) 私が考え (estenbat) 人々が(私の考えを) 行う、私が法令 (fatwa) を出すことは、すべての人々が行う、と。しかし、いくつかの法令については(一般信者の好みに反する場合) 事態はこの通りではないことがわかりました。」

勿論、本文にあるタキーエの種類は、(ボルージェルディー) 師がおっしゃったタキーエとは同一ではありません。二種類のタキーエがあるのです。伝承にあるタキーエは、我々聖職者の環境には当てはまりません。それは世界中のどこにでも普通にあることで、解決の方法がありません。しかし、我々聖職者の環境に当てはまるタキーエは、我々の機構組織の方法に当てはまるもので、最近見られるものです。(ボルージェルディー) 師も、少し機会を得て、自らの痛みを表明されたのです。

ホウゼイエ・イルミエ学院の創設者であられる故ハーエリー (Ayat al-Lah Haj Shaykh 'Abd al-Karim Ha'eri Yazdi) 師は、何人かの学僧に外国語といくつかの初歩的な科学を身につけさせて、イスラームを新しく修得された環境の下で、外国でさえ広めさせようとお考えになりました。このニュースが明らかにされたとき、一団の大衆やテヘランの偽りの民衆がコムに行って最後通牒を与えたのです。「人々が『イマームの取り分』の名目で与えているこの金は、学僧たちに異教徒の言語を学ばせるためのものではありません。もしこのことが続くなら、我々はこれこれの事を行いますよ。」と。故人(ハーエリー) は、これを続けることは、ホウズイエ・イルミエ学院の分裂と事業の基礎を崩壊させることだと理解されたので、やがて自身の高尚な意図を撤回されたのです。

数年前、故エスファハーニー (Ayat al-Lah Aqa Sayyid Abu al-Hasan-e Esfahani) 師が指導

者であった時代に、多数のナジャフのウラマーや賢者たち（fazla'）—現在彼らの幾人かはマルジャであります—が会合を開き、意見を交換した後、次の見解で一致しました。つまり、学僧たちの授業計画で刷新を行い、イスラーム教徒の今日的必要を視野に入れ、特にイスラーム教徒の信念の原則に属する問題を学僧の授業計画にとり入れるということでした。要するに、ナジャフのハウゼ（学院）を法学（foqahat）や resaleh-ye amalieh navisi の独占から離れさせるということでした。事の次第が師（エスファハーニー）に届きました。師は、以前に故ハーエリー師に起こった出来事や同様の出来事から学んでおりましたので、次のような手紙を送りました。つまり、私が生きているかぎり、誰にもこの学院の機構に手を触れる権利はない、と。さらに加えて、学僧たちに与えられている「イマームの取り分」は、ただ法学（fiqh）と（法学）原理（osul）のためにあるのであって、そのほかのためではない、と述べたのです。明らかに彼の行動は、現在ナジャフのハウゼの指導者である方々への教訓（dars amuzandeh）でした。

以上の説明から、なぜ我が（シーア派界で）著名な人々が行動を起こすとき、その意図を達成できないかが明らかになりました。（また）心を痛め、改革への思いをいつも心に抱いているにもかかわらず、実践する力がなぜないのか。なぜ我々のハウズイエ・イルミエ学院は宗教大学の形から「法学（単科）学科（daneshkadeh）」になったのか。なぜ我がウラマーや賢者たちは、有名になったときに、法学と（法学）原理以外の学問を修めているにもかかわらず、それらに覆いをして、非合法（monkar）としたのでしょうか。なぜ怠け者（bikareh）や放埒の草（'alaf-e harzeh）が我が聖職者の聖なる環境には多いのでしょうか。それはちょうど、一人の聖職者である指導者が一本の花に水を上げるために、多くの茨や雑草にも水をあげなくてはならないようなものです。なぜ我が聖職者の環境には、沈黙と静止、自己を死なせること（tanavot）や死人のようなもの（mordeh va shi）が、論理や行動の生き活きとした性格以上に優先されるのでしょうか。なぜ思想的信条の自由が我々の間では乏しいのでしょうか。なぜ学僧たちの学科や宗教学の科目が今日の必要に応じて組み立てられないのでしょうか。なぜ我が聖職者たちは、社会の先導者、隊商の案内人であることをしないで、隊商の後についてゆくのでしょうか。なぜ、なぜ、一体なぜなのでしょう。

改革の方策

改革の方策は、我々聖職者が一般会計を持つことなく、すべての（聖職）者が自身の勤労によって生活することではありません。また改革の方策は、我が聖職者たちがエジプトの聖職者たちのように政府に従属することでもありません。

改革への道は一つです。つまり、聖職者の現行の財政を組織化することです。現行の「イマームの取り分」の扱い方は例えて言えば次のようになっています。すなわち、政府が教育者（farhangiyan）の生活を安定させるために予算を定め、彼らを任命して、（彼らは）人々の歡心を引くことの代償としてこの予算を受け取るようなものです。すべての人は、あらゆるやり方で人々を手に入れることができますが、（本来なら）良心に従って

(vejdanan) 私的な必要を超過する分については、他の人に与えるのが義務であるはずですが。

明らかに、この状況では文教 (farhang o ta'lim o tarbiyat) の実情はどのような形になるのでしょうか。教師たちは子供の保護者たち (awliya) — 分類的には大衆なのですが — の歓心を得るように教育を行うのです。このやり方は、大衆が自分たちの誤り (fariban) を前面に出し、見識者 (saheb-e nazaran) や教育の改革を求めるもの (eslah talban) を排除します。このやり方は、偽善の市場、追従、真実の隠蔽や外見の繕い (zaher sazi), そしてついには大衆と結びついてあらゆる欺瞞が彼らの間で蔓延ってしまう原因となります。(また) このやり方では、教師は子供の保護者たちを一種の「所有地 (mostaghel)」のように見なしてしまう原因になります。そして一人の地主、または工場の所有者 (すなわち教師) がより多くの利益の分け前をもたらすように、子供の保護者のために働くことになります。さらに大衆の歓心を買う弊害が現われます。たとえば、偽善、外見の繕い、真実の隠蔽、乞食主義 (geda maslaki) のみならず、公平に富を分配しない弊害、たとえば謀略 (kineh), 敵意, 秘密 ('oqdeh), 悪意などが生じるのです。

我が聖職者の財政は、現在このような状況です。改革の方策は、一人の聖職者も直接人々の手から日々の糧を得ない (ertezaq) やり方で、聖職者の中心地に共同の出納部 (sanduq-e moshatarak) と帳簿、会計、貸借対照表 (bilan) を作成することによって、財政組織を設置すること以外にはありません。各人はそれぞれの働きに応じて、マルジャとハウズイエ・イルミエ学院の一級の聖職者の権威のもとにある会計部から自分の生活の糧を得るのです。

もしこのようになれば、人々は (信者たちは) 自分の信念と信仰に応じて自らの財源から (宗教税を) 支払うようになります。やがて、大衆の支配はやみ、聖職者の襟 (首) は大衆の掌握から開放されます。すべてそれらの弊害は、聖職者が直接人々から日々の糧を得ていることから生じているのです。すべての者は個人的に資金提供者との関係を保持し、彼の歓心を引こうとするからです。

すべてのマルジャイ・タクリードは、その職 (modiriyatash) が「イマームの取り分」と結びついていて、ハウズイエ・イルミエ学院の学僧たちに与えるのですから、個人的な信頼を得て、この財源を確保しなければなりません。現状では、都市の聖職者たちは、聖職者としての職を生業 (horqeh) とし、マスジェドを仕事場に定めるしか方法がありません。

この状況が改革されれば、誰も信者と直接的 (経済) 関係 (sar o kar) を持たないでしょう。マルジャイ・タクリードは自由となり、マスジェドは小店舗のイメージから離れ、(人々が) マスジェドで苦情を訴える現状もなくなるでしょう。もはや大マスジェドやゴウハルシャード・モスクのようなところで、何十人もの人々がそれぞれ隅にたむろして、賢者 (adam-e fahmide-i) に抗議することなくなるでしょう。(また) もはや次のような問いが発せられることもなくなるでしょう。すなわち、なぜスンナ派の人々の間では集団礼拝が栄光に満ちているのに、シーア派の人々の間では対立が現われているのか、という問いです。

生計の手段

生計の手段は簡単には手に入りません。それは生活の基本 (rokn az arkan-e asasi) です。もし（これが）混乱してしまうと、生活の他の部分が影響を蒙ります。

イスラームの特徴の一つは、生活手段の影響の問題に細かい注意が払われてきたことです。従って人々の中には、イスラームは（生活が）下部組織 (zir-benna) である、という考えに屈服している (gardan nehadan) と考えてきた者がいるほどです。現実主義的 (vaqe' bin) で現実志向 (vaqe' negar) のイスラーム学派は、経済を下部組織とは認めません。しかし、その基本的プランを考慮しないのでもありません。イスラームは生計手段の改革を社会のあらゆる大小の組織において必要条件とは認めますが、十分条件とは認めないのです。従って、生活手段獲得の仕事は、容易ではありません。それは生活の基礎中の基礎です。もしこれが混乱してしまうと、生活の他の部分も影響を蒙るようになるということです。

何人かの家族がいる一人の宗教心のある (motadayyun) 聖職者がいると想像してみましょう。数年間の研鑽を終えてある都市に定住し、マスジェドと礼拝所 (mehrab) で仕事をしていました。この人物は敬虔であることから、自分の住居の近くで活動します。生活の問題は、人々から直接生活手段を得ることです。仕方なく自らの弟子（従者）たちを「土地 (mostaghel)」のように見ます。彼と似たような他の者が同じ町に居ることもあり得るわけで、彼らも同じやり方で生活しています。自然の創造の原則に従って、一種の「弟子集め」の競争が現われるようになります。競争はより多くの人々の歓心を引くことを要求します。このかわいそうな人物が大衆と意見の不一致を認めた時、次のように考えるかもしれません。悪の否定は害とならぬ場合は、義務的行為 (vajeb) であり、害となる場合は、義務停止 (saqet) である、と。この人物が生活手段を通じて人々と結びついていることは、彼のイスラーム法に関する義務の感覚、思考を変えてしまうのです。

厳しい経済条件のもとで自らの責任に応じて行動してきて、競争や「弟子集め」とは無縁の (monazam-and) 例外的な人々がいたし、今もいることは認めます。しかし、言葉 (sokhan 最終決定権?) は実際には一般の人々です。「最良の部分 (nokhbah つまり、例外的に優れたウラマー)」だけが責任の徳を果たすことができる、という現実を生み出す必然性などありません。

信仰と敬虔の結果

敬愛する読者は、次のように考えるかもしれません。我々がこれまでの話（計算 hesab-ha）において、現状を改革するうえで、信仰と敬虔の驚くべき影響を忘れてしまっ、問題を単に生活手段という小さな視点（窓 daricheh）から分析してきた、従って、これまでの話は現世的な社会の組織に関しては正しいが、罪のない敬虔な人々から構成され、その結びつきが精神性 (ma'naviyat) である霊的組織については当らず、霊的な組織においては、信仰や知性の精神がシステムや組織やあらゆる種類の予防手段 (mohkam kari) を含んでいる、（と考えるかもしれません）。

申し上げますが、そうではありません。私は信仰と敬虔の驚くべき影響力を承知しております。信仰と敬虔は多くの問題を解決しますし、多くの予防手段を含みます。もしそのような予算が同様の自由があって、責任、帳簿、会計、貸借対照表なしで、非聖職者の組織の権威のものと置かれれば、どうなるかは明らかです。政府組織においては、あらゆる長くて幅広い組織と責任、刑罰、ならびに裁判所によっても、横領（ekhtelas）の記録が数知れず裁判で提出されているのを毎日見えています。我が聖職者をこれらすべての無秩序から守り、分解するのを妨げてきたのが宗教と知性の力です。

聖職者の聖なる領域において、故アンサーリー（Haji Shaykh Mortaza Ansari）師のような指導者もおられまして、ご自身の言葉によると、お金に対してまるで服を洗う桶の汚い水に対するように眺められたそうです。そして、ぜひとも必要な場合にのみ、少しずつそれ（資金）を使われたのです。宗教的学問を修めた人の中には、生活に対して禁欲や満足（qana'at）、肝っ玉の太さ（mana'at）で比類のない人が昔もいましたし、（今も）います。教師や学友、最も身近な友人にすら自分の貧しさを知らせずに過ごしている（者がいるのです）。次の（コーランの）章句が証明しているとおりです。

（此牛 2：273）

يَخْسِبُهُمُ الْجَاهِلُ أَغْنِيَاءَ مِنَ التَّعَفُّفِ

慎みぶかいために、知らない者からは不自由していないと思われるが、

システムと組織の効用

私たちはいかなるものも敬虔と信仰にとって代われないし、信仰と敬虔が多くの欠点を補う（jobran）ことを承知しております。しかし、他方、信仰と敬虔がすべてのものの後継者であると認めることもないはず（bena nist）。すべての者からそれ独自の結果を期待できるに違いありません。精神は物質の場を完全に埋めることはできませんし、また物質も精神の場を埋められません。知性（精神？）においても、いかなるほかのものの場を完全に埋めることはできないのです。たとえば、知性は信仰の後継者にはなれないし、信仰は知性の後継者になることはできないのです。

システムと規律（enzebat）、組織もまた人類の生活の聖なる原則です。もし精神性（ma'naviyat）と信仰が無秩序や無方針の弊害を除去することが分かれれば、聖職者の生活手段の無秩序、無組織が信仰と精神性の柱をより一層揺るがし、腐敗の環境を生み出してきたことを知るでしょう。

誠に残念なことは、幾人かの偉大なマルジャイ・タクリードの子供や孫、関係者たち（havashi）が、これほどの聖職者の財政的混乱と無秩序の中で横領を行い、長期にわたり贅沢に支出し、（その悪い慣行がいまだに）終っていないのを目前に見ていることです。この慣行がどれほど聖職者の世界に害をもたらしたか、又（現に）もたらしているか全く考えたことがないのでしょうか。

我々聖職者の社会の大きな問題の一つは、虚偽の組織（sakhteh-ye dastega-ha'i）となっている見せびらかしの聖職者の存在です。それらの組織は、この者たちに権力を与えており、財政がこの（組織の）権威のもとに置かれています。かれらの狡猾さと誘惑（tatmia）、その他の手段で他のメンバーを自分たちに同化させ、現実には常に彼らの利益とイスラーム教徒を害するために活動しているのです。

本講演の中で、それらから生じた腐敗や墮落に関して議論したくありません。皆さんは多かれ少なかれ、このことに気付いているのです。ここでは、この腐敗の根の根絶は我々聖職者の正しい組織を除いて不可能であるということだけを申します。

説教と宣揚

説教と宣揚（tabligh）と説教壇は、我々聖職者と結びついた一つながりのものです。この点に関して責任の問題や果たすべき奉仕、昔も今もある欠点について論じれば、独立した一つの論考となるでしょう。ここではこれまでのテーマにあわせて、次のことだけを申します。つまり、我々の説教と宣揚の制度は別の種類の大衆害にとらわれているということです。これはもはや財政や「イマームの取り分」とは関係がなく、この仕事は慣習の一つの職業、仕事、商売の形をとって、賃金の名目と見なされていることと関係があります。すなわち、コーランに拠れば、すべての預言者たちが多くの場合差し控えていたのと同じ問題が我々の間で横行しているということです。明らかに、真正な法に依れば、経済問題の中に定められたこと、たとえば販売のために品物を供給することになったあらゆるものの需給は、消費者（masraf konandeh）の要望に従うのであって、彼の善意（maslahat）に従うではありません。

もしほかの階層のあらゆる人々が販売することになれば、ただ善意のために（販売することになります。）我々の説教や宣揚という仕事もまた、イスラームとムスリムたちの善意のためという形をとると考えることができます。

私は真正の説教や善意、これまで遂行されてきた価値のある奉仕の存在を否定しているわけではありません。また、一端現状を変えて、別の教育を施そうという考えに与しているのでもありません。ただ私は、次のような考えに同意しています。すなわち、聖職者の組織自体が真正な計画に基づいて説教者たち（khatib o va'ez）を訓練し、彼らの生活を統制し、彼らが自らの任務に関して（報酬を）要求するようになると、このグループ（の人々）は、自由に考えることができるようになって、（大衆との）結びつきを持たなくなるでしょう。このグループの存在は、他の者が従うのに十分であって、我々の説教と宣揚のシステムもまた聖職者組織同様に自由をもたないでしょうか。大衆の無知との戦いにおいて無力でしょうか。

警告（hoshdar o endhar）

もし神が我々聖職者組織の財政の問題を解決することを望まれるなら、その他の欠陥はその解決に付随することでしょう。もし我々が行わないならば、時が（ruzgar）行うでしょう。

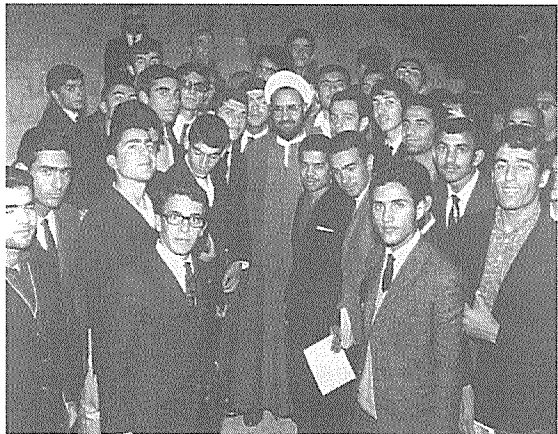
う。大いに希望がもてる点は、我々には資格があり、偉大で献身的な改革を求める人材が我々聖職者の中にいることであります。たとえば、第一級(の方々)、マルジャイ・タクリード、第一級の説教者から学僧、学習者 (mohasselin) そして若い説教者などです。

この講演の中で申しましたことは、神が我々聖職者の間に他の階層の人々に比して、欠点があることを望まれない、というわけではありません。そうではなく、この講演自体の意図は、話者（私）がこのすばらしい組織 (in selseleh-ye jalileh) に属することに期待をもっている、ということです。私の期待とは、真正な組織が聖職者の間で打ち立てられることによって、我々の中の資格を持った顕著な人々に門戸が開放されることであり、彼らの真正な目標が実行される方策が結集されることであります。

私見では、基本的な改革が形をなしていない間は、改革論者の責任は、たまたま時間をあまりとらない仕事に従事して自らの生活を行い、自らの収入で生活することです。その結果、自由に考え、自由に発言し、一つの自由なイスラームの砦を守り、一つの基本的な改革への手段を結集することができるのです。

我々偉大な聖職者たちは、聖職者の存続とイスラームの存続が次の点にあることを理解しなければなりません。つまり、今日その必要性が明白になった深遠なる改革の独自性を、宗教指導者 (ze'ama-ye din) が手にしなければならない、ということです。今日、彼らは国家に対して半ば目覚めた状態であって、日一日と目覚めてきています。今日の世代が聖職者に期待しているものは、過去の世代が期待していた以外のものです。いくらかの人々が抱えている粗野で (kham) 愚かな期待を離れ去りましょう。(今日の世代の) 期待の大半は合法的で (mashru') 適宜な (be ja) ものです。もし我々聖職者ができるだけ早期に動かず、自分たちの襟 (首) を大衆の手から自由にし、自らの力を結集し、白日のもとに (han-e binaneh) 歩を進めなければ、大いなる危機が敬虔さのない (世俗的?) 改革者の側から喚起されるでしょう。

今日この国民は、混乱した (na besamani) 状況を改革することを渴望しています。明日はさらに渴望することでしょう。(彼らは=イラン人は) 他の国民に比して、遅れていると感じている国民なのです。それらの国民に追いつこうと急いでいるのです。一方、敬虔さ (diyanat) に関心のない改革者を求める者が多くいます。今日の世代の新しく気高い感情が隠れています。もしイスラームと聖職者がこの国民の気高い必要 (hajat-ha) や願望、感情に確固たる解答を与えないならば、新たに現われる (世俗的指導者に導かれる) あれの方へ注意が向けられるでしょう。考えてみてください。もし改革



استاد در جمع دانشجویان دانشگاه شیراز

にこの人々が携わるとすれば、イスラームと聖職者の存在が危機に陥らないでしょうか。

しかし、神の力によって解決が我々に与えられれば、どのような基盤の上であれ、どうかして計画に基づいて（組織を）形成しなければなりません。（そして）国の（qowm）知識人たち（rowshanfekran）は座して、企ての段取りを、教育計画の見地や行政の見地、その他の分野（見地）からしなければなりません。これに関して、私は覚え書きを準備しておりますが、この講演がこれ以上長くならないように、今は差し控えます。

希望と期待

私はあるグループの人々がこれらの考えや希望が無駄であり、実行できないと考えていることを知っています。彼らの考えでは、今の時代に聖職者に聖職者の組織を確立することは、死人を生き返らせたり、少なくとも死に定められた病人を救うようなものだ、というのです。

しかし、わたしは全く逆のことを考えています。聖職者が本来の存在という観点から、最も生命力のある組織（dastegah）であると認識しております。鉄の鎖（gholl）と鑿がこの生きて活動する存在（mawjud すなわち、聖職者階層）の手足に結び付けられています。それで、彼を枷と鎖から自由にしなければなりません。我々聖職者は、高貴な生まれで（asil）価値があり、災害を蒙る木であり、自らを守り、その災害と戦わねばならないと申してきましたし、今も申しあげます。その木が枯れて、閉じたもの（pushideh）だと考え、根を掘り返さねばならない、と考える人の見解は、100%拒否され、禍をもたらすものであると認識しております。私は、「聖職者抜きイスラーム（Islam minha-ye ruhaniyat）」というテーゼが常に帝国主義者（este'mari）のテーゼであると考えてまいりました。私は何者も聖職者の後継者になることはできない、と確信しております。イスラームの高貴で深遠かつ価値ある文化の担い手は、この集団であると理解できます。その敬虔さと信仰、知性、誠意（ekhlas-ha）熱意（jushesh-ha）、さらに運動と献身は、我が国民の存続する根源的秘密（ramz）であり、ただこの聖なる国土にのみ輝くものなのです。

聖職者の改革への信念と希望を、私は二つのこと、つまりイスラームとその豊かな文化（智識 ma'aref）に関する研究とこの組織が持っている資格ある人材に関する情報の両面から、獲得したのです。従って、この組織の改革を義務であると数えておりまして、実際にそれをありえないことと思わないばかりか、完全に実現間近であると認識しているのでございます。

解説

本翻訳はモルタザー・モタッハリー（1920 - 79）⁽¹⁰⁾ による Moshkkel-e Asasi dar Sazeman-e Ruhaniyat（「宗教階層の組織化における基本的問題」）の全訳である。タイトルを「宗教学者の経済基盤と組織化」としたのは、この方が本文の内容をより正確に伝えるからである。著者のモタッハリーに関しては、拙稿「モルタザー・モタッハリーの生涯」（『大阪外国語大学論集』）などで詳述しているので、ここでは簡潔に述べるにとどめる。⁽¹¹⁾

モタッハリーは1979年に成就したイラン・イスラーム革命の指導者の一人としてイラン人の間で広汎な影響力をもった人物である。彼の本領は、イスラームのイデオロギーを現代の用語で解説しようとした点にある。西洋哲学に関する該博な知識に基づいて、西洋哲学の欠点を批判した。特にマルクス主義に代表される唯物論（無神論）に対して強い警戒感を表しているのが特徴である。同時に、西洋の近代思想の人間中心主義的傾向に対しても舌鋒は鋭かった。彼の論説は、大学生など若年層を中心に幅広く受容された。現在も宗教学者全般に猜疑心を持つ若者の間においてすら、根強い人気を博している。

このように西洋帝国主義諸国に対する批判と同時に、モタッハリーが懸念し改良の必要性を痛感していたのが、彼自身の属するウラマー（宗教学者）自身の腐敗荒廢の現状であった。本講演が行われたのは1960年代初期であると推定できるが、この時期は、パフラヴィー王朝の専制的、高圧的支配が米国の支援を得ながら加速してゆく時期に当る。従って、ウラマー階層にとって決して快適な時代とはいえない。他方、本来信者の指導者としての役割を果たさねばならないはずの宗教学者自身にも問題があった。つまり、本講演で指摘されているように彼らは倫理的に腐敗し、もはや本来の機能を果たしていないという認識がモタッハリーにはあったのである。

モタッハリーの議論の特徴は、自己の属する集団の弁護を一方的に行わない点にある。そうではなく、彼は自身がウラマーであることに誇りを感じながらも、むしろそれ故にこそ自らが果たすべき任務を生涯の研究テーマとしていた。シーア派の基本的教義である「隠れイマーム」の不在中に宗教学者の果たすべき役割は、いわば共同体の存亡に関わっている。ウラマー階層自体の自己批判と改革なくして、シーア派の在立はないという深刻な現状認識があった。

この流れの中で、モタッハリーは、ウラマー階層の腐敗をもたらし最大要因は彼らの経済的自立の欠如であるとして、これを改善する方策を論じたのが本翻訳文である。

誠に残念なことは、幾人かの偉大なマルジャイ・タクリードの子供や孫、関係者たち (havashi) が、これほどの聖職者の財政的混乱と無秩序の中で横領を行い、長期に渡り贅沢に支出し、(その悪い慣行がいまだに) 終わっていないのを目前に見ていることです。この慣行がどれほど聖職者の世界に害をもたらしただか、又 (現に) もたらしめているか、全く考えたことがないのでしょう (P. 19)。

さらに、一般信者との接触の中で、宗教税 (ホムス = 五分の一税) に過度に依存していることが宗教学者の自由な活動の枷になっている点を指摘している。

実は、ウラマー階層内部からこれほど突っ込んだ自己批判がなされた論考は類を見ない。しかも、宗教家自らが、現実の問題を解決する鍵を経済上の組織化に求めた議論は極めて珍しいといえる。本論を翻訳、紹介しようと決意した動機はここにある。

本文を読めば、聴衆が宗教学者、学僧、ならびに宗教関係者であったことは容易に推察可能である。本文中の

我々聖職者の社会を麻痺させ、立てなくしている災害は大衆禍であります。大衆の

害は洪水の被害や地震の被害、蛇やさそりの害よりも大きいものでございまして、この大きな害は、我々の財政システムの結果生じたのであります。

この様な発言は、表面的に読めば、モタッハリーが一般信者を愚弄しているとも受けとめられかねない。もちろん、彼の真意は、前の引用が明らかにするように、イランの現状を踏まえた上で、一般信者を啓蒙する過程において宗教学者グループが果たすべき責任ある役割である。宗教学者の権威の基盤が一般信者との「健全な」関係にあることは明らかであることから、議論のポイントが彼らを愚弄したり、その関係を断とうとしたりするものでないことは明らかである。逆にモタッハリーが訴えようとしているのは、新しい時代の変化に対応する際に、ウラマー自身がややもすれば守旧的、現状維持の立場を選択する傾向のある一般信者を啓蒙しながら、より強い、健全な信者共同体を建設するために、自らに課した重い責任を果たす必要性の表明であるといえよう。宗教学者が保守的、伝統墨守の総元締めのように見なされる風潮の中で、むしろ新しい時代の変化に対応するために、西洋の模倣ではないイスラーム独自の価値を提示しようとする試みでもあった。他方、宗教学者が高い倫理性を保つことは、モタッハリーの生涯を一貫する最大の問題であった。

本資料は、イスラーム・シーア派の内部事情に精通した人物により、同脈のかかえる問題に相当突っ込んだ批判検討がなされたものとして、非常に価値の高いものである。なお、訳出に当っては、『十の講話 Dah Goftar』所収のものを用いたが、同論考は現在進行中の全集 (Majmueh-ye Athar-e Ostad-e Shahid Motahhari) にも収録されている。なお、訳文は、元来講演に基づいているため、講演調にした。

註

- 1) 「イマームの取り分」とは、シーア派において信者に課せられた税金の一部の名称である。各信者は一年間の必要経費を差し引いた金額の五分之一をホムス (khoms) として自らの選んだマルジャイ・タクリドに支払う。この資金は、①神、②預言者、③イマーム、④孤児、⑤貧者、⑥旅行者に配分されている。厳密には③が「イマームの取り分」であるが、実質的には、前三者は宗教学者 (ムジュタヘド) がほぼ自由裁量で用いることができた。本文にもこの点が記されている (ページ)。この資金によって、宗教勢力は為政者から政治的に独立の立場を保つことができたのである。
- 2) プラトンの「賢者の町」に関しては、『プラトーン全集 I V』岡田正三訳、全国書房、昭和 45 年、を参照した。
- 3) ファーラービー (870-950) は、フルネームを Abu Nasr Muhammad といい、「シーア派の黄金期」といわれる 10 世紀に活躍した哲学者。
- 4) ワクフとは、イスラームにおいて信仰の厚い人々によって寄進された宗教的寄進財のことである。ワクフは、元物 (asl) の拘束 (tahbus) を意味し、元物からの収益 ('ain) を売買したり、その他の取り引きを停止 (motavaqqof または mowquf) することである。そして、その利益を一般の人々や、特殊なグループや人々、特別な地区や場所の福祉 (masaleh) のために用いることである。この制度について、コーランに規定を見出すことはできないが、スンニ、シーア派両派においてサダカの一形態として受け入れてきた。両派の解釈は、大半において一致している。現実には法

理論と実際の慣行の間には大きな隔たりがあった。しかし、宗教寄進財からの収益は、宗教制度の維持、存続のために欠くことができなかった。ワクフについては、拙稿「ワクフ考—12 イマーム派シーア主義における理論と実際 (19 世紀のコムを中心に)」『日本中東学会年報』no.2,1987, pp.187-213 参照。

- 5) ホムスに関しては、註(1)を参照。さらに、たとえば、Borujerdi, Resaleh-ye Towzih al-Masa'el, pp. 371-390 などを参照。
- 6) シーア派では、すべての信者は宗教的義務を果たすための条件として、一人の宗教学者を選出し、彼に従わねばならない。この選ばれた人物は、高級宗教学者たるモジュタヘドでなければならず、マルジャイ・タクリードと呼ばれる。一方、従う信者をモカッレド (moqalled) という。マルジャイ・タクリードは生きた人物であって、死亡した人物であってはならない。19 世紀の半ばに複数のマルジャイ・タクリードを一人に統合しようという動きがあり、サーヘベ・ジャヴァーヘル (Saheb-e Javaher) が初代の単一のマルジャイ・タクリードとなった。その後、アンサーリ (Mortaza Ansari) が引き継ぎ、この制度は 1962 年にボルージェルディーが没するまで続いた。この制度によって、宗教学者の権威は著しく高揚したが、後者の没後、適当な後継者が見当たらず、シーア派の宗教界は大いに混乱した。1960 年代に、この制度をめぐる、聖俗両界の知識人を巻き込んで熱心に議論された経緯がある。本翻訳の論考は同時期に行われた議論の一部である。マルジャイ・タクリードに関しては、拙稿『イスラームの祭り』フォン・グルーネバウム、法政大学出版会、2002 年、pp.161-169 を参照。
- 7) 反タバコ利権闘争、立憲革命などに関しては、たとえば加賀谷寛『イラン現代史』近藤出版、1975 年などを参照。イランの近・現代史においては、宗教学者主導の反政府、反帝国主義運動が展開される点に特徴があった。その極点ともいえるのが 1979 年のイスラーム革命である。
- 8) ムスリム知識人 (rowshanfekran) という場合、宗教的知識人 ('olama-ye dini) と明確に区別する必要がある。前者は世俗的知識人であり、後者は本文が問題にしている宗教を生業とする専門の学者である。また、rowshanfekaran は、状況によって宗教に共感を示さない非宗教的知識人を指す場合もある。(p.21) で言及されているのは、おそらくマルクス主義者であると推測できる。
- 9) タキーエ (taqieh) とは、シーア派がアッバース朝時代に激しい迫害を受けた時期に考え出された宗教上の制度で、危害を避けるためにみずからの信仰を一時的に隠すことである。この行為は決して恥ずべきものではなく、必要な場合はむしろ推奨された。これに関しては、たとえば、
'Allamah Sayyid Muhammad Husayn Tabataba'i, Shi'ite Islam, tr. by Sayyid Hossein Nasr, London, 1975, pp.223-225, 付録 1 を参照。
- 10) 拙稿、「モルタザー・モタッハリーの生涯」『大阪外国語大学論集』第 31 号、2005 年、参照。
- 11) Dah Gofar, Entesharat-e Sadra, n.d. pp.187-213.

(2005. 11. 2 受理)